

渡る世界に鬼はない？

— ニューヨークで命の値段を値切った話 —

宮崎 伸光

前略

ビックリしました。まさかパリでM子さんにお逢いするとは。オペラ座の脇にあるカフェ・ド・ラ・ベは、滞在中に何度か足を運んだ所ですが、あの時も濃いコーヒーを味わいながら道ゆく人々をのんびり眺めているところでした。

この手紙が届く頃、丁度M子さんは演奏旅行からお帰りになられることと思います。私は、その後大西洋を渡り、現在はニューヨークとボストンの間、コネチカット州のニューヘイブン市という所におります。ここは、米國独立以前から栄えた古い港町で、イエール大学のある学園都市としても知られた所です。

ここに来る途中、聞きしにまさる「醜獄都市」ニューヨークでなかなか得難い体験をしました。

シャルル・ドゴール空港を飛び立った私たちが、七時間二三分の空の旅を終え、ジョン・F・ケネディ空港に着陸したのは、八月一九日の一三時二分のことでした。

新しい土地に着いた時、私たちが最初にすることは決まっています。その日の宿の確保です。そこでまず必ず電話を探します。というより、電話のかけかたを知ることが先決でした。同行のI氏は、

用電話で実に手際良く交渉を済ませました。私たちは、日本から持って行ったホテルのリストが載った雑誌を見せましたが、そこは危険だ、の一言で片付けられ、料金はほぼ同じと言いますが、勝手に違うホテルに予約を取り付けられてしまったのです。

なんだか妙なことになってきたぞ、と思う間もなく、男はI氏から荷物のある場所を聞き出すと、そちらに向って急ぎ出しました。一番驚いたのは弟でしょう。なにせ見るからに強そうな白人が、いきなりザックの一つをかつぎあげてしまったのですから。

荷物を持って行かれては大変ですから、私たちは残りのザックを背負うとその男を追いかけました。殆どかけ足に近い感じで男は先へ先へと急いで行きました。男は大きな声で、車の所まで連れて行く、と言いました。

私たちの行く手には、大きな黒塗りの車がトランクを開けて待っていました。日本では見たこともないような大きな車です。男は、そのトランクにかついでいたザックを放り込むと、残りも入れろ、と言いました。もちろん、私たちは断りました。空港とニューヨーク市街（マンハッタン）が遠いことは知っていましたが、バスや地下鉄で行くつもりでしたからです。ところが男は、これはホテル・リムジンだから心配はない、と言います。確かにホテルの送迎用のリムジンがあることも知っていましたが、まさか私たちが泊るような安ホテルにそれがあろう筈がありません。もちろん、きっぱりと私たちは断りました。しかし、いつの間にかもう一人大柄な男も加わり、二人は、オフィシャル・サービスだから乗って行け、と繰り返したのでした。料金は、と問えば、オフィシャルだからよい、との返事。首をかしげているうちに、私たちのザックはトランクの

高校の英語科教員ですから、こういう時は一番頼りになります。すばやく市内通話は二五セントと誰からか聞いてきました。そこで、私とI氏は弟に荷物番を頼んで電話を探しに向ったのでした。

日本の駅では、時々観光案内のカウンターのようなのを見かけることがあります。丁度それと同じようなものの前に、私たちはよいものを見つけました。ホテル予約専用電話です。これはヨーロッパ各所にもあり、行き当たりばったりで宿を決めている私たちのような旅行者には大変便利なものでした。無料で直接ホテルのフロントにつながるのです。

さっそくI氏が受話器を取ろうとしました。その時、観光案内所前にいた太った男が走り寄ってきて大声で「さわるな」と怒鳴りました。I氏も私も、一瞬何のことか分かりませんでした。

太った男は、ホテルの予約か、と尋ねました。そうだ、と答えると、ならば俺がしてやろう、と言います。一度は断ったのですが、ヨーロッパで数多くの親切な人々に出逢ってきたばかりの私たちは、つい気を許してしまい、今思えば、しだいにその男のペースにままってしまったのでした。

男は、私たちの人数とI氏の名のスペルを聞くと、ホテル予約専

中へ、そしてトランクはピッタリその蓋が閉じられてしまったのでした。

もうそうだったら、その車に乗らざるを得ません。大きなリムジンの後部座席に、I氏、私、弟の順で結局乗り込んだのでした。車内に入ると、既に運転手が乗っていました。その脇に二人が着席し、それで終わりかと思っていたら、左側のドアが開き、運転手席の背中から補助席を引き出してもう一人の男が座り込みました。つまり、計七名が同乗した訳です。直ちに車は、音もなく空港を後に出発したのでした。

後で弟から聞いたのですが、すぐ脱出できるようにと思っただけで右側のドアを見ると、それは針金で細工がしてあり、内側からは開けられないようになっていたということです。左側も補助席の男のおかげでやはり私たちが開けることはできません。窓もリモコンで前列の男が操作し、完全に密室の状態になってしまったのでした。

私は急いでウェストポーチの中から手帳を取り出しました。車は、すぐ高速道路に入ったので、せめてどこを通過したのかを記録しようと思ったのです。相当な速度でとばす車内から道路表示を書き取る作業は、そうやさしいことではありませんでした。この白い表紙の手帳だけがブカブカとハドソン川を流れて行く情景が、頭の中に浮かんできました。ポールペンを握る右手はやはり多少震えていたのでしょうか、今見ると字はグシャグシャです。その時は、もちろんそんなことに構ってはいられませんでした。

男たちは、時折話しかけてきました。ニューヨークへはどこから来たのか——日本から着いたばかりだ。職業は——三人とも学生だ。何日滞在するのか——四日間だ。等々、みんなウソを答えます

した。今思えば、まったく幸いなことに、ヨーロッパでは三人とも首からニコンをぶら下げていたのですが、この時に限ってそれらはみなザックの中でした。どこから見ても貧乏学生の冒険旅行に見えるナリでいた訳です。

男たちとの会話は、I氏がだいたいうまくさばきました。私は、メモをとっていることを悟られないように、時々会話に参加しました。男たちによれば、空港とマンハッタン島は五キロメートル離れているということでしたが、車に揺られること約二〇分で、前方にマンハッタンらしき高層ビル群が見えてきました。確かにニューヨーク市街に向かって車は走っていたのでした。私たち三人は少しホッとしました。

しかし、それもほんの束の間のことでした。車がマンハッタン島に渡ると、これまでに全く見たこともない光景に私たちは囲まれたのでした。ハーレムと呼ばれている地域でした。今にして思えば、この地域に乗りつけ、無言のうちに私たちを威圧するために、車は遠回りしていたのでした。車は速度を落としました。あたりは、もう数十年も手入れされていないだろうと思われる崩れかかったビルが建ち並び、職を持ってない有色系の人々がウロウロと暇を持て余していました。それも若い人々が大勢でした。車の速度が落とされるにつれ、この車から引き摺り出されたらどうなるのか、悪い想像が頭をよぎりました。

「このリムジンの運転手にオフィシャル・レートの礼金を払ってください」太った男がこう喋りました。

それきた、と思いました。I氏が、いくらだ、と尋ねると返事は“Two forty.”と返ってきました。私が、二ドル四〇セントなら安

意外なことに、答えは、オーケー。二〇〇ドル(約五万円)にしてやろう、というのです。太った男がそう言ったとたん、補助席の男はまたパフォーマンスを始めました。俺は二四〇ドル支払ったのだ、後ろの奴らが二〇〇ドルならば、俺もまける、というのです。そして結局、彼もおまけしてもらったのでした。太った男は、後ろの学生さんのおかげで二〇〇ドルで済んだのだからお礼を言ったらどうか、と言い、補助席の男は振り返って、有り難う、を繰り返しました。とんでもない話です。その「有り難う」は、早く支払え、という脅し文句なのですから。

私たち三人は相談しました。そして、もう仕方ないだろう、支払おう、命あつての物種だ、ということに落ち着きました。結局合計六〇〇ドル(約一五万円)の大金を支払いました。

金額を確かめると、車はマンハッタンの中心部に方向を変えました。男が予約したホテルは、ブロードウェイのタイムズ・スクエアから通りを二本入った所がありました。ビルの陰で、ホテルの入口が見えなくなる所までやり過してから車は止まりました。そして無事トラックの中のザックも返されました。私は車のナンバーを確認しようとして後ろに廻りましたが、そんなものは付いていませんでした。太った男が、またI氏のザックをかつぎ、ホテルの方へ行って行ったので、私たちも、それを追いかけるを得ず、車からは早々に離れることになりました。太った男はしゃあしゃあとしたもので、ホテルの前で、「トモダチ」とか何とかあやしい日本語を語り、握手を求めてきました。それに応じなかったことはもちろんのことです。

いじやないか、とI氏に言うのと、彼は、いや違う、と否定しました。そう、男は一人あたり二四〇ドル(約六万円)を要求してきたのでした。

I氏は、英語はお手のものですから、そんなに払ったら貧乏学生の自分たちは旅行を続けられなくなる、とか何とか懸命の抗弁に努めていました。私の方は、情ないかな、そんなに現金の持ち合わせがない、旅行小切手でも構わないか、と尋ねたりしました。そうこうするうちに、I氏の前の補助席に座っている男が財布からドル紙幣を取り出すと、前列の男に支払うではありませんか。そう、彼はサクラの役だったのです。太った男は、前の人が支払ったのだから早く払え、と強気にでるし、補助席の男は、二四〇ドルとは安い、運転手くん有り難う、とか何とかパフォーマンスを始めたのでした。太った男は、旅行小切手を見せてみる、と言いました。その時、また偶然にも幸運なことに私は、弟と二人分の旅行小切手を高額のものと低額のもの二つに分けて持っていました。もちろん高額の方は隠し、低額の方だけを、弟と二人分でこれしか持っていない、と言って渡しました。

前列の座席に並ぶ男たちは、互いに顔を見合わせ笑っています。本当にこれしか持っていないのか、と何度も彼らは私に尋ねました。“Don't.”で始まる彼らの疑問文に、“正確に。”で答えることに気がつかっていた私は、そのような最中に受験生時代の英文法を思い出していたのでした。ついでに私の口から自分でも思わぬ言葉が飛び出しました。「幾らかおまけしてくれない」——なんとこの大胆な発言。瞬間自分の命すら危ないことを忘れていたのでした。

男たちが去って行った後、あたりを見渡せば、悪臭がただよい、廃棄ガスはよどみ、道路のマンホールというマンホールからは蒸気があふれ出ていました。つくづく恐ろしい所に来てしまったと思いました。

しかし、意外なことに、ホテルはきちんとI氏の名前で予約されていた。エアコンやテレビも完備されており、料金も男の言う通りでしたが、確かにそれよりは比較的安全なようでした。「運転手への礼金」以外は、案外彼らは良心的だったのかもしれない。

事件の後、ホテルの部屋で一番最初にしたことは、三人の所持金の再確認でした。その結果、どうやら旅行の継続に金銭面での支障はないことが分かりました。白い表紙の手帳には、まだ震えの止まらない字で「精神的ショックさえ治れば大丈夫」と書かれています。

翌日、私たちは警察へ出掛け、被害届を出しました。その際にもいろいろ面白い体験をしたのですが、その話は御土産話にとっておきましょう。

ここニューヘイブンは、街中に野生のリスがチョコチョコ走り廻るのんびりとした都市です。こうして恐怖の体験を繰り返すうちにどうやらやっと余裕ある旅人の気持ちを取り戻すことができたようです。

ずいぶん長くなってしまいました。今度お目にかかる時には、どうぞ演奏旅行のお話をお聞かせ下さい。楽しみに致しております。それでは、時節柄充分御自愛下さいますように。

草々